

現在の関西弁における方言意識と標準語化

抄 録

私は普段から使っている関西弁の現状について調べた。関西弁話者の方言意識は他地域や全国に比べて非常に高く、また関西弁の中には新方言が多く含まれている。新方言使用率では子供の使用率が圧倒的に高いことがわかり、関西弁の言葉はこれからも変化し続けるだろうと考えた。

キーワード：方言，関西弁，方言意識，新方言，ネオ方言

1. はじめに

1.1 研究動機

自由研究準備の授業の際、方言について調べると、方言が衰退して使われなくなっている地域や、新方言という新しい言葉が使われている地域があることを知った。そこで、普段私が使っている関西弁にもそのような変化が起こっているのかを詳しく調べようと思い、研究テーマとした。また、先行研究（田中、2016）では関西弁話者の方言意識が他地域に比べて高いことが分かっているので、方言意識にどのくらいの差があるのかなどを調べようと思った。

1.2 研究目的

現在の関西弁話者の関西弁に対する方言意識について明らかにし、先行研究と結果を比較する。また、関西弁の標準語化について、関西で使われている新方言や、その使用率も明らかにする。

2. 研究方法

2.1 文献調査

全国の方言を対象として方言意識と新方言についての先行研究を調べ、次に関西弁の特徴などを調べる。

2.2 アンケート調査

方言への意識や新方言の使用率を調べるため、アンケートを行う。対象者は関西在住者（主に大阪・奈良）で、100人程度に行う。質問数は9問、形式は選択式、複数回答不可、選択肢の中に入らない場合は記述とする。

質問内容（ ）は選択肢

- ①性別（男性・女性）
- ②年齢（20歳未満・20歳以上）
- ③居住地域（大阪市内・大阪南部・大阪北部・奈良・その他）

方言意識について

- ④ 関西弁は好きですか (好き・嫌い・どちらでもない)
- ⑤ 関西弁に誇りを思っていますか (はい・いいえ・どちらでもない)
- ⑥ 標準語に対して関西弁に劣等感を感じることはありますか
(ある・ない・どちらでもない)

標準語化について

- ⑦ 次の三つの言葉をいうとき、どの言葉を使いますか
 - (1) こない (こーへん・けーへん・きーひん・きゃーへん・こない・その他)
 - (2) してしまう (しちゃう・してまう・してしまう・その他)
 - (3) わからなくなった (わからんくなった・わからへんようになった・わからんようになった・わからなくなった・その他)

2.3 実験手順

まず、文献調査をし、アンケートを作成する。次にアンケートを行い、集計しアンケート結果を出す。最後に全体の結果から考察する。

2.4 分析方法

まず、アンケートの全体での結果を出す。3.1では先行研究と比較し、3.2では大人と子供で比較する。

3. 結果

3.1 方言意識について

方言意識とは、自分の地域の方言に対して抱く、感情や意識のことである。方言が衰退する理由として、地元の方言を嫌ったり方言に関心を持たなくなる、いわゆる方言意識の低下が挙げられる。そこで、今の関西弁話者の方言意識について調べた。

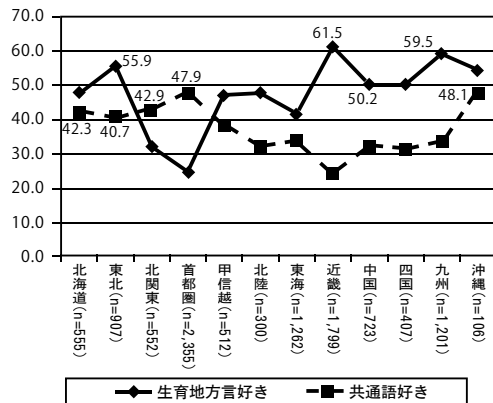
(1) 文献調査結果

関西弁を話す人は関西弁への強い誇りとプライドを持っており、標準語への対抗心も高い。また、方言調査で次のような先行研究がある。

このグラフを見ると、「生育地方言好き」という人の割合が近畿が最も高く、一方で「共通語好き」という人の割合が近畿が最も低いことがわかる。

従って、関西弁話者の方言意識は他地域に比べても非常に高いことがわかる。

(田中, 2016)



生育方言と共通語「好き」の地域差

(2) アンケート調査結果

本当に関西在住者の関西弁への方言意識が高いのかを明らかにするためにアンケート調査を行った。

- ① 関西弁は好きですか ② 関西弁に誇りを持っていますか ③ 標準語に対して関西弁に劣等感を持ったことがありますか

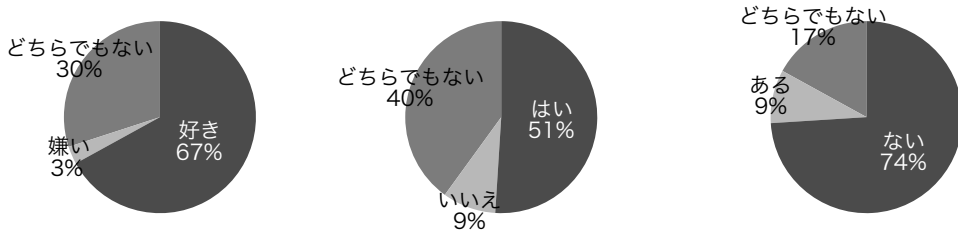


図1：全体の結果

このグラフから、関西弁に対して否定的な意見が少ないことがわかる。しかし、この結果だけでは、「関西弁話者の方言意識は高い」と断言することができないため、次のような比較をした。

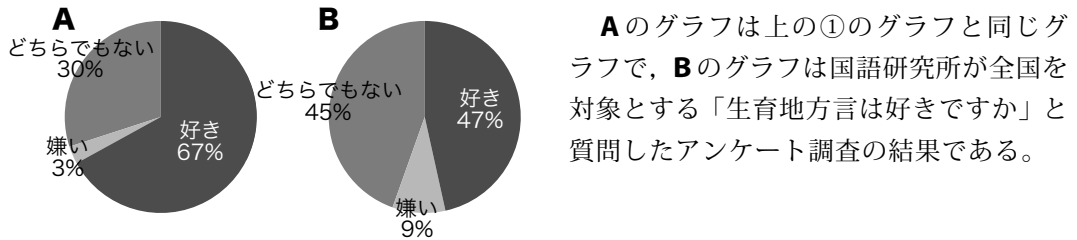


図2：地元の方への好悪～全国と関西～（田中，2016）

Bのグラフより**A**のグラフの方が「好き」と答えた人の割合が20%程高いことから、関西弁話者は地元の方（関西弁）に対して非常に好意的であるということがわかる。よって、関西弁話者は方言意識が高いと言える。

方言意識が高いことから考えると、急激に「関西弁が使われなくなる、関西弁話者が減る」というような変化は起こりにくいと考えられる。

3.2 関西弁の標準語化

最近では関西弁話者が知らず知らずのうちに標準語を使っていたり、関西弁が変化していたりする。そこで、どのように標準語化しているのかを調べた。

(1) 文献調査結果

標準語化する理由に、「新方言の増加」というものがある。新方言とは名前の通り、「新しい方言」である。井上（1993）は新方言を次のように定義づけている。

新方言の定義

- ① 現代の若い世代に向けて使用者が増加しつつあること。

- ②地元でも「方言」扱いされていること。
- ③語形が標準語・全国共通語と一致しないこと。

また、三浦は新方言が作り出される流れとして次のように述べている。

- I, 各地域が独力で創造した新たな方言形式
- II, 各地域が全国共通語や他方言の影響を受けながら作り出した方言形式
- III, 他地域にもとからある方言形式を新方言として採用した方言形式

この中でも、IIのうち全国共通語の影響を受けて作られたものを「ネオ方言（ネオダイレクト）」と呼ぶ。関西地域で使われている新方言は主にIIとIIIである。いくつかの代表例をここで挙げる。

分類	新方言	本来の方言	作り出された流れ
II	こーへん	けーへん, きーひん	こない+けーへん
II	いかへん	いけへん：行かないの意味	いかない+いけへん
II	わからんくなった	わからへんようになった	わからなくなつた+わからん
III	しちゃう	してまう	もとは東京の言葉
III	アオタン	あざ	もとは北海道の言葉

(真田・2011, 山下・2004, 佐藤・2015, 尾上・2010, 三浦, 南, 産経WEST)

図3：関西弁話者が使う主な新方言

このように、普段よく使う言葉でも新方言が多い。

(2) アンケート調査結果

このような新方言がどのくらい使われているのかを調べた。今回、アンケートの質問内容として例に挙げたのは「こない」「してしまう」「わからなくなった」の3つである。

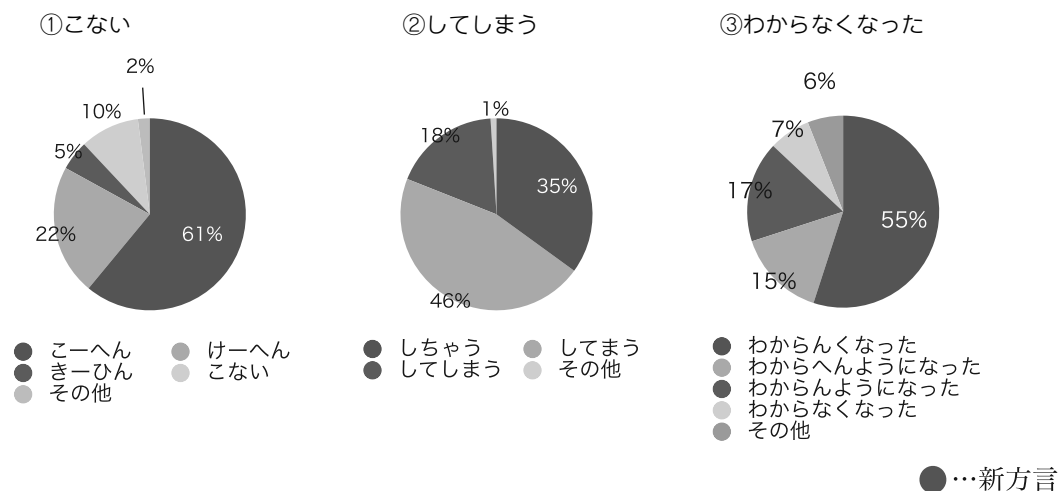
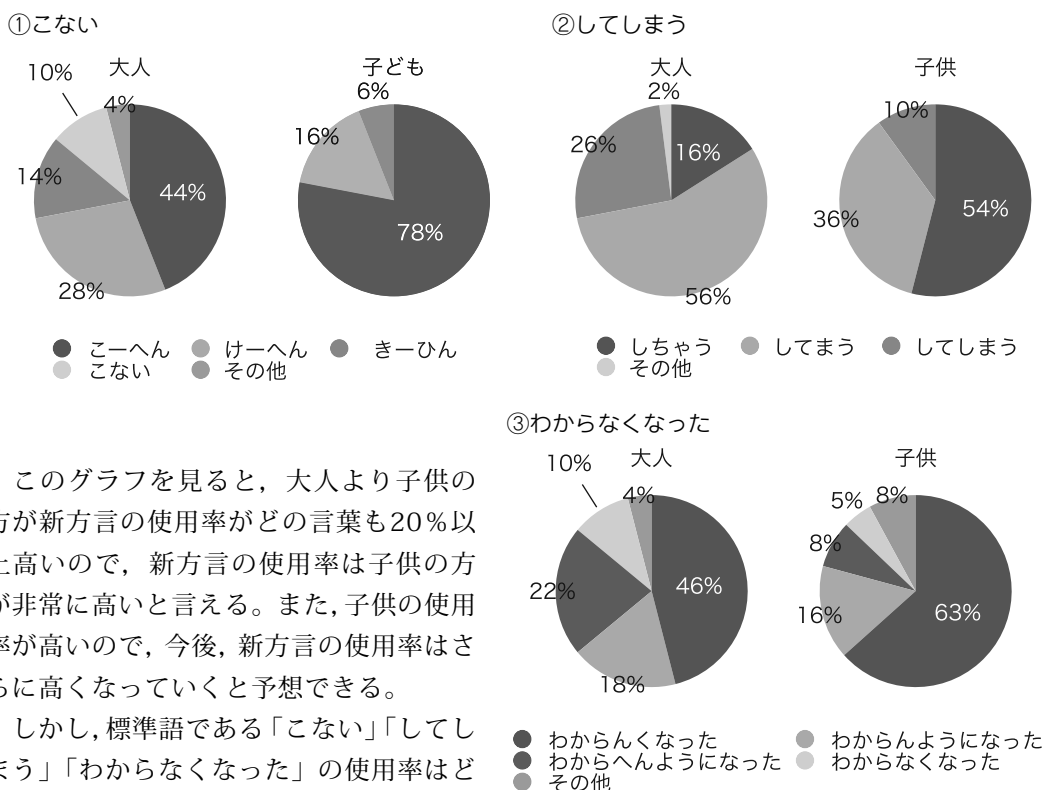


図4：全体の結果

この結果から、約3割～6割の人が新方言を使っており、新方言の使用率は非常に高いことがわかる。また、約1割の人が標準語を使っていることもわかる。

井上（1993）の「新方言の定義」の中に、「現代の若者に向けて使用者が増加しつつあること」とある。そこで、上の結果を20歳以上と20歳未満にわけ、大人と子供の新方言の使用率を比較した。



このグラフを見ると、大人より子供の方が新方言の使用率がどの言葉も20%以上高いので、新方言の使用率は子供の方が非常に高いと言える。また、子供の使用率が高いので、今後、新方言の使用率はさらに高くなっていくと予想できる。

しかし、標準語である「こない」「してしまう」「わからなくなった」の使用率はどれも子供より大人の方が高い結果となった。これについては、理由がわからなかったため、今後の課題としたい。

図5：大人と子供の比較

4. 考察

方言衰退の一番の原因とされている方言意識については、先行研究でも本研究でも関西弁話者の方言意識は高いという結果となった。この結果から関西弁は、他地域に比べて急激に関西弁話者が減ることはないと考えられる。また、方言意識が高い理由として、関西弁はメディアの中で多く使われるなど広く受け入れられているため、関西弁話者は自分の方言に自信が持てるということが挙げられる。

標準語化については、新方言の使用率が大人より子供の方が高かったため、今後、新方言の使用率は高まり、関西弁の標準語化は進んでいこう。

5. 結論

関西弁話者の方言意識は高い。しかし、新方言の使用率は高く、特に子供の使用率が非常に高い。関西弁話者は関西弁に対して非常に好意的だが、関西弁の標準語化が起きていることが明らかになった。

参考文献

尾上圭介著（2010）『大阪ことば学』岩波書店.

佐藤亮一著（2015）『滅びゆく日本の方言』新日本出版社.

真田信治編（2011）『方言学』朝倉書店.

田中ゆかり，林直樹，前田忠彦，相澤正夫（2016）『国立国語研究所論集：一万人から見た最新の方言・共通語意識』repository.ninjal.ac.jp（2018年8月16日）

山下好考著（2004）『関西弁講義』講談社.

言語の使い分けと心理|三浦知恵 <mgu.ac.jp> (2018年8月2日)

東京に近づく関西弁|産経WEST <samkei.com> (2018年8月2日)

方言調査7 | 南雅彦（国立国語研究所） <gengoj.com>（2018年8月23日）